

平成27年度霞ヶ浦学講座 第13講 結果報告

実施日時：平成28年3月20日（日）13:30-15:30

場所：霞ヶ浦環境科学センター多目的ホール

講師：沼澤 篤（霞ヶ浦環境科学センター嘱託） 参加者数：35名

テーマ：「霞ヶ浦の歴史2 ー近代～現代（水害の克服から開発へ、水質悪化から改善へ）」

要旨：明治期の霞ヶ浦は、蒸気船や高瀬船の水運で津々浦々、利根川水系各地、東京と結ばれ、湖面は様々な船で賑わい、庶民や文人墨客が水郷観光、東国三社詣を楽しみました。その後常磐線の開通、自動車の普及、道路網や橋梁の整備で、物流の主役は次第に陸運に移りましたが、鹿行地方では水運に依存していました。沿岸各地では大規模干拓が着手されましたが、水郷農業は湿田での過酷な農作業と度重なる水害で疲弊し、水害克服が霞ヶ浦農民の悲願でした。水産業では帆引漁が普及し、佃煮生産が盛んになりました。

戦後復興の基礎として、建設省は大河川下流の河川改修工事（河道の分離、拡幅、浚渫、築堤）を本格化し、流出河川の常陸川は利根川下流と分離されました。その推進には治水の父と呼ばれた須田誠太郎（旧牛堀町長）らの貢献がありました。これによって水害は激減しますが、海拔高度が低い霞ヶ浦に塩分濃度の高い水が逆流し、水田、飲料水に塩害が生じました。建設省は農民団体など地元の要望を受けて、常陸川水門（逆水門）を1963年に設置しました。また鹿島臨海工業地帯、筑波研究学園都市建設によって、霞ヶ浦は安定的な水資源として期待され、淡水化への要請が強くなったのです。築堤によって水害が皆無となり、干拓地を含む沿岸の湿田は土地改良によって排水、乾田化が進み、大型農機が入る安定した優良農地へ変貌しました。また湖水は沿岸各地の揚水機場で取水され、農業用水として遠隔農地へ送水されるようになりました。降水量が少ない県西地方では、霞ヶ浦用水事業が農業の安定化に貢献しました。首都圏に隣接するつくば市、牛久市、龍ヶ崎市などでは人口が急増しましたが、その上水道水は霞ヶ浦から供給されています。こうした県南を中心とする発展に、「霞ヶ浦開発事業」（1996年概成）が大きく貢献しました。

他方、治水・利水を重視した「霞ヶ浦開発」の負の側面として、過度の富栄養化、生物多様性低下、沿岸湿地・植生帯の激減、水産業の衰退を招きました。そのうち、富栄養化の進行は閉鎖性水域の宿命ともいえますが、都市化などで流域の土地利用が変化し、農業や畜産業の構造変化、森林減少などの要因が拍車をかけました。水産業では天然漁業から育てる漁業への転換が図られ、鯉網生簀養殖漁業が一時期生産量を伸ばしましたが、度重なる大量斃死を経て規模縮小を余儀なくされました。

近年、地域社会では水質改善や自然再生など、霞ヶ浦の環境回復が大きな課題となっています。茨城県では霞ヶ浦水質保全条例、国では湖沼水質保全特別措置法に基づく霞ヶ浦水質保全計画を策定し5年ごとに見直しながら、下水道普及率向上や農業集落排水処理施設、高度合併処理浄化槽設置等の成果を上げています。また第6回世界湖沼会議(1995年)を契機として、茨城県霞ヶ浦環境科学センターを設置し、水質保全研究の推進及び環境教育や交流促進事業等に取り組んでいます。

